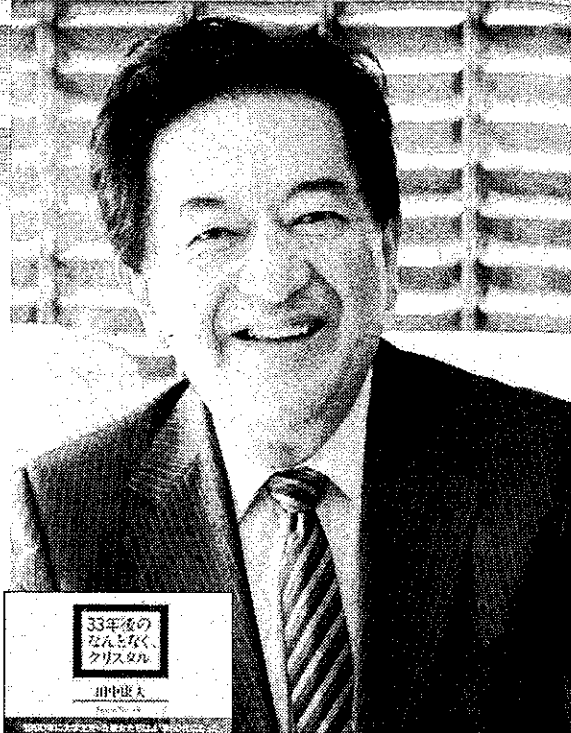


SUNDAY LIBRARY

田中康夫

自分の言葉で考え、生きる 『微力』な彼女の強さ

INTERVIEW



『33年後の
なんとなく、
クリスタル』
田中康夫
(河出書房新社/1600円)

ガラス張りの知事室から永田町
というッやつちや場を抜け、
再び小説の世界へ。「めでたく2年前
に敗退したから」戻ってきたと笑う。
1980年、一世を風靡した小説、
通称『なんくり』から33年。続編と
もいえる新しい物語を発表し、先ご
ろ一冊にまとまった。

「2013年が文藝賞の50回記念
『文藝』創刊80周年にあたるので、何
か書きませんかと以前から言われて
まして。社会評論や代表質問の原稿
を書いていた時間が長かったので、
『論』にならないように苦心しました」
80年、大学に通うかたわらモデル
を続けていた主人公・由利。「なん
となく気分がいい方」を選んで生き

ながらも、ふと10年後の自分を考え
る。そして33年後、50代になった由
利は会社を立ち上げ、携わる子宮頸
がんワクチンの啓発事業に思い悩
み、南アフリカでの社会貢献にも力
を注ぎようとしている。作家のヤスオ
は、由利や当時の仲間だった女性た
ちとの久しぶりの再会を通して、さ
まざまな思いにふける。

「彼女たちは、それぞれ自分の意見
や考えを持っています。でも、男性
社会に拳を振り上げて、女性の地位
向上」を主張したりはしない。手垢
のついた言葉ではなく、自分で見
つけた言葉で生きている女性を描きた
かったんです」

ワクチンの是非、高齢化社会の問
題点、ダム建設などの話題が、「おし
やべり」という『論』ではない言
葉で語られる。彼女たちの言葉と、
『正義』を語る人の言葉は、実は等価
なのだ。33年前、10年後の未来の不
透明さを察じていた彼女たちは、自
分の言葉を持ち、健やかでしなやか
に生きている。不安や悩みはあつて
も、引き受ける勇氣と覚悟がある。
それが、33年という時間の持つ意味
なのかもしれない。

昔は、渋谷のハチ公前の待ち合わ
せに恋人が来なくても、振られたの
が事故故にあったのか確かめようもな

かった。今はメールやラインで簡単
に連絡がとれるけど、夜中に届いた
ラインが未読だと翌日に学校で子供
たちはいじめられたりする。豊かに
なったのか、便利になったのか、息
苦しくなったのか。わからないです
よね」

社会が変わること、時代の風が変
わること。そこには何か大きな力
—たとえば政治や経済に類するような
—が働いていると思われがちだ。ま
た、そういう「大文字」の世界に属
している人たちは、「国を背負う責
任」などというそれらしい言葉で自
分たちの影響力の大きさを誇り、あ
たかも何かを動かしているように思
っているかもしれない。

「『微力』で無力じゃない」って
言葉を感じたいの」と由利は言う。
自分の足で立ち、頭で考え、心で感
じることのできる者だけが自分の
『微力』に気づける。そして、少なく
とも『無力』ではないことを願ひ、
ほんのちよつびり自分に期待する。
その小さな期待が、前に進む一歩に
なることを信じて。

今は、右肩下がりの「たそがれど
き」。差し込む光は仄かだが、それは
夜明け前の光にも思える。最後にヤ
スオは言う。「僕もまた、その光に向
かって歩み出す」
構成・佐藤恵

たなか・やすお 1956年、東京都生まれ。作家。80年『なんとなく、クリスタル』で文藝賞受賞。阪神・淡路大震
災後、ボランティアに従事。長野県知事、参議院議員、衆議院議員を務める。著書に『サーステイ』『愛国米談』など。

価格はすべて税抜き表記です。

撮影・根岸基弘